

彙報

第五回野尻湖クリルタイ

村上 信明

第五回野尻湖クリルタイ(日本アルタイ学会)は、二〇一八年七月一三日(金)～一六日(月)に長野県野尻湖畔の藤屋旅館で開催され、四五名(同伴家族を含む)と四九名)が参加した。本年(二〇一八年)は六月に大阪北部地震、七月に西日本豪雨と災害が続き、諸氏も様々な困難があるなかで野尻湖に駆けつけたとのことであった。以下、参加者のコンフェッションの一部を紹介する。業績は昨夏以降に活字化されたものを中心に紹介し、副題及び書籍等の編者名・出版年は省略する。

泉谷知花(明治大M)はモンゴル帝国を中心に遊牧国家における遊牧民のあり方を検討し、卒論を完成させた。今後は遊牧国家における家畜、特に「羊」の生産・消費のあり方を研究する予定。伊藤一馬(大阪大)は昨年九月に第二屆宋遼金元夏史の日中青年学者交流会で研究報告を行い、続いて中国洛陽・西安・固原・銀川でフィールド調査を实

施。本年三月に『宋西北辺境軍政文書』に見える宋代文書書式とその伝達(『大阪大学大学院文学研究科紀要』五八)を発表。伊藤崇展(大阪大D)は初参加。修論ではモンゴル帝国による軍事物資の供給・輸送のあり方について検討した。林慶俊(東京大D)は「清朝宮廷における内務府旗人の存在形態」(『内陸アジア史研究』三三三)を執筆。また二〇一八年度朝鮮史研究会関東部会五月度例会で「大清国の対朝鮮関係における内務府旗人」と題して研究報告。若田啓介(東京外大A A研・学振PD)は「青海ホシユート部のアムド・チベット人支配の確立と清朝」(『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』京都大人文研)、「鬪うチベット文学」の著者ツェラン・トンドウプの祖先たちの鬪いの歴史」(『チベット文学と映画制作の現在SERVIA』五)を執筆。牛根靖裕(立命館大)は北京大への留学をへて三年ぶりの参加。本年三月、遼金西夏史研究会で「漳県汪氏文化研究会編纂資料簡介」と題して報告。ウランバル(音光(復旦大))は中国で活躍する清朝史・清代モンゴル史の若手研究者。早稲田大学文学術院の訪問学者として来日中で、野尻湖クリルタイには実に九年ぶりの参加。永良(神戸大M)は初参加。内モンゴルのフレイ旗出身で、曾祖父・祖父はラマだったとのこと。清朝時代のラマ旗について研究。大坪慶之(三重大)は一五年ぶりの参加。昨年発刊の『変

法派の書簡と『燕山楚水紀遊』（汲古書院）では自由民権家の山本憲が受け取った清末変法派の書簡について解題を付したうえで翻刻・翻訳を行う。岡洋樹（東北大）は二〇一六年八月にモンゴル国大統領からモンゴル研究への学術的貢献により「北極星勲章」を受勲。昨年は「大清国による歴史記述のモンゴル史的文脈」（『北東アジア研究』別冊三）を執筆。その他、国内外での研究報告や講演が多数。上出徳太郎（元東京大D）は一年ぶりの参加。清末新疆の財政の研究を進める。塩谷哲史（筑波大）は初参加。近代中央ユーラシアの水路に関する研究を進める。「一八四二年ガールジャール朝使節団のヒヴア派遣」（『内陸アジア史研究』三三）を執筆。『ウズベキスタンを知るための六〇章』（明石書店）で三項目を担当。設楽國廣（立教大名誉教授）は本年四月に中近東文化センターのアナトリア考古学研究所の勉強会で「オスマン近現代史におけるケマル・アタチュルク」と題して講演。白川紘惟（筑波大M）は一九世紀の青海でのモンゴル人とチベット人の争いに対する清朝の対応について研究。修論の準備を進める。杉山清彦（東京大）は昨年七月に専修大学法学研究所ワークショップで「マンジュ（満洲）王朝としての大清帝国の国制とその歴史的位置」と題して報告（↓『専修大学法学研究所報』五五）。また『中央ユーラシア史研究入門』（山川出版社）では「中

央ユーラシア国家としての清朝」を担当。その他、概説的論考を複数執筆。鈴木宏節（青山女子短大）は昨年一〇月に勤務校で「ちいさな大モンゴル展」を企画し、モンゴルの地理・自然・生業・歴史を解説。同月には東京女子大学読史会大会で「トルコ遊牧民と突厥碑文」と題して講演（講演録↓『史論』七二）。関根知良（筑波大D）は第三回滿族史研究会大会で研究報告。その内容をベースに「順治期における清朝とハルハの交渉過程」（『滿族史研究』一六）を執筆。タイワンバータル（神戸大交換留学生）は修論執筆後の昨年九月に来日し、本年夏まで滞在予定。清代モンゴル法制史を研究。高倉駿（筑波大M）はウズベキスタンに留学中。コーカンドハン国の諸集団支配に関する研究を行う。多久孝一郎（筑波大D）は二年ぶりの参加。一昨年に「清朝による第三次熬茶使節の許可・護送の方針」（『史境』七二）を執筆。武井悠介（大阪大M）は三度目の参加。卒論では五代のソグド系武人を取り扱った。今年から修士課程に進学。チャダンフー（神戸大交換留学生）は国立モンゴル大学の学部生。チンギスハーン時代の研究を志す。チヨウルモングリル（朝魯孟格日勒）（神戸大協力研究員）は家族連れでの参加。「清代外モンゴルのセチエン・ハン部における盟界画定の経緯」（『史林』一〇〇―一三）を発表。テムル（特木勒）（南京大）は本年三月から半年の予定で東

北学院大に滞在。専門は北元期〜清初モンゴル史で、この度は夫人・令嬢を伴っての参加。中井勇人（東京大D）は一五〜一七世紀のジュシェン・マンジュ社会史を研究。本年、朝鮮史料研究会で『八旗滿洲氏族通譜』よりみる明代ジュシェン社会」と題して研究報告を行った。中村和之（函館工業高専）は放射線等を用いた年代測定研究の専門家とともに函館市や松前町の遺跡から出土した鉄滓やガラス・玉・蝦夷錦等の年代測定・化学組成分析を実施。多数の共著論文を執筆し、本年二月に発表された共著論文「加速器質量分析法による蝦夷錦の放射性炭素年代測定」（考古学と自然科学）七五）が日本文化財科学会第一二回論文賞を受賞。また単著論文として「流鬼国をめぐる試論」（『古代国家と北方世界』同成社）を執筆。本年五月の日本考古学協会二〇一八年度総会では「北海道の教育におけるアイヌ史・アイヌ文化の位置づけ」と題して報告。ナルス（神戸大研究生）は愛知大で修論を提出し、今年から神戸大に移籍。蒙疆政権の研究を進める。牛瀟（明治大M）は曲阜の孔廟祭祀について碑文を読み解きながら研究。修論では元代曲阜の孔廟祭祀を取り扱う予定。萩原守（神戸大）は昨年九月に学生を引率してモンゴル国立大学を訪問。モンゴル国立中央文書館で文書調査も実施。本年の第三三回滿族史研究会大会では「清代モンゴルにおける犯罪者捕獲の期

限設定」と題して講演。ハスゴワ（ハス高娃）（神戸大D）は「清末期オールドス（イフ・ジョー盟）における聖母聖心会の宣教師による初期布教活動」（『日本とモンゴル』五二―一二）を発表。林俊雄（創価大）は二年ぶりの参加。昨年「冒頓単于」（『悪の歴史 東アジア編【上】』清水書院）、「中央アジアにおける農耕の起源と展開」（『農耕の起源と拡散（アジアの考古学4）』高志書院）、本年は「車の起源と発展」（『馬が語る古代東アジア世界史』汲古書院）、「騎馬遊牧民の誕生と発展」（前出『中央ユーラシア史研究入門』）等の論考を発表。半田真士（筑波大M）は初参加。清朝乾隆期の繙訳科挙と旗人のキャリアのあり方について研究を進める。星泉（東京外大AA研）も初参加。『現代チベット語動詞辞典（ラサ方言）』・『古典チベット語文法』の作成などこれまでの研究内容を紹介した。近年は「チベット牧畜文化辞典」の編纂に取り組み、本年三月にオンライン上での公開を開始。ボヤンテグス（宝音特古斯）（内モンゴル大）は早稲田大学の中央ユーラシア研究所の訪問学者として来日中。清代モンゴル史が専門で、現在は一八世紀前後の清朝・オイラト・モンゴルとチベットの関係を研究。日本では東洋文庫所蔵の撫遠大將軍胤禩の滿文奏摺などの調査を行う予定。堀直（甲南大名誉教授）は一年ぶりの参加。学生時代に東洋文庫の清代史研究室で岡田英弘・松村

潤両氏に卒論の相談をしたことを述懐。また甲南大を退職後に所蔵図書をソウル大に寄贈した際のエピソードなどを語った。堀内香里（東北大D）は二〇一二年以来の参加。二〇一五年に「清代後期ハルハ・モンゴルの旗内行政統治における印務処の機能について」〔東北アジア研究〕一九を執筆。堀川徹（京都外大）は“Ergül firkaeyni kazasından sonra Osmanlı İmparatorluğu'ndan gelen teşekkür mektupları” Uluslararası Ergül'un izinde Deniz kuvvetleri ve diplomasi Sempozyumu. 16-17 Eylül 2015/İstanbul. Deniz Kuvvetleri Komutanlığı Yayınları, 2016. を執筆。前出『ウズベキスタンを知るための六〇章』で二つの項目とコラム二篇、前出『中央ユーラシア史研究入門』でコラム二篇を担当。前野利衣（東京大D）は「一七世紀後半ハルハIIモンゴルの権力構造とその淵源」〔史学雑誌〕一二二（一七）を発表。また第八回内陸アジア史学会賞を受賞した。峰雪幸人（早稲田大）は初参加。五胡十六国時代史が専門。一昨年に「慕容政權遷都考」〔中国古代史論集〕雄山閣）を発表。昨年九月には山西省北部で五部匈奴の遺跡調査を実施。宮脇淳子（東洋文庫研究員）は朝日カルチャーセンター新宿等で連続講義を行うほか、ネット動画で歴史講義を実施。二〇〇八年発刊の『朝青龍はなぜ強いのか』(ワック)の改訂新装版として『モンゴル人力士はなぜ嫌われるのか』(ワック)を刊

行。村上信明（創価大）は「乾嘉時期清朝与達頼喇嘛的關係」〔成大歴史学報〕五三）を執筆。森本創（明治大D）は昨年九月から北京大に留学中。「南宋四川社会における呉氏一族の位相」〔文学研究論集〕四七）を執筆のほか、本年四月には嗜好品文化研究会の報告書上で「西南高原地域における茶の嗜好品化と諸部族ネットワーク」を発表。その他、各種学会で研究報告三回、講演一回を行う。柳澤明（早稲田大）は「一七〜一九世紀の露清外交と媒介言語」〔北東アジア研究〕別冊三）を発表。また露清交渉におけるトルグートの扱いについても研究を進める。このほか学生の自主ゼミで三藩の乱の鎮圧に加わった旗人の満文著作『隨軍紀行』の読解を進める。山本明志（大阪国際大）は史料集『敦煌石窟多言語資料集成』（東京外大AA研）において「敦煌石窟モンゴル時代漢文墨書・刻文集成」の執筆を担当。また「モンゴル時代のチベットにおける都元帥」（前出『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』）を発表した。渡邊美樹（日本女子大D）は契丹の外交・軍事を研究。「契丹の燕雲十六州領有と山後遊牧民」〔史艸〕五八）を執筆した。

続いて研究報告の概要を述べる。一三日（金）夜の報告は一つ。林俊雄「中国、ロシア、韓国におけるシルクロード研究事情」は、最近二年間に参加した中国（二回）・ロシ

ア(三回)・韓国(二回)の学会において得た知見を報告。特に注目すべきこととして、この三カ国における「シルクロード」をめぐる動きを挙げる。まず中国は、二〇一四年に中国主導で洛陽・長安からカザフスタン南部をかすめてクルグズ(キルギス)北部までが「シルクロード」として世界遺産に認定された際には、その时期的範囲は紀元前二世紀、すなわち張騫西行以降と限定されていたが、現在ではそれ以前の時代も視野に入れてシルクロードという概念を拡大しようとしていると指摘。また韓国では中国・旧ソ連圏との交流を通じてシルクロードを新羅の都・慶州まで延長させようとの運動が行われており、ロシアではシベリア東部の研究機関が、モンゴル・北中国をも巻き込んでシルクロード研究を展開しようと呼びかけていることを紹介。このような動きに対して、日本の対応が問われているとした。

一四日(土) 午前の報告は二つ。渡邊美樹「軍馬確保の消長より見る『澶淵の盟』前後の遼宋夏関係」は、遼宋間の盟約である「澶淵の盟」締結の前後における遼宋夏関係を、軍馬確保の消長という点に着目して検討。一〇世紀末には軍馬・騎兵の供給源たる燕雲十六州をおさえた契丹がさらに新興のタングート李氏の自立を助長し、北宋の軍馬確保を阻害しようとしたこと、一一世紀初頭にはタングート李氏の拡大が北宋の軍馬確保の要たる西涼府・甘州回鶻

まで及び、そのため北宋が李氏との和解を急がざるを得なかったことを示し、遼宋夏の間では「澶淵の盟」後も軍馬をめぐる軍事的緊張が依然として続いていたと指摘した。牛根靖裕「河西」のトルイ家の投下(位下)は、従来は

ジョチ家・チャガタイ家・オゴデイ家の右翼三王家の投下(位下)が設けられたとされてきた西夏故地に、実はオゴデイ時代に右翼の諸王として扱われたトルイ家の投下も設定されていたのではないかという見解を提示。オゴデイ時代にソルクタニベギに贈られた河南・関西諸路四万戸のほか、元代の河中府・解州・河南府・京兆府(安西路/奉元路)・延安路・チャガンソール・兀刺海路といった広大な領域にもトルイ家投下の戸口が存在し、モリン道(唐代の「参天可汗路」)によってモンゴル高原のトルイ家本領とながる経済圏を構築していた可能性を示した。

一四日昼には希望者を募り野尻湖遊覧船を楽しむ。快晴の空の下での遊覧で気分をリフレッシュさせ、午後の部に入る(報告は二つ)。テムル(特木勒)「南遷前兀良哈蒙古人の遊牧補考(南遷前のウリヤンハイ|モンゴル人の遊牧地補考)」は、宣徳・正統年間(一四二六―一四四九年)のウリヤンハイ三衛の南遷以前における朮顔衛の在所について論じた和田清の論考を再検討。同論考ではじめ和田は、朮顔衛は内モンゴル・ジャライト旗の綽爾河流域に位置し

ていたと推測したが、その後『華夷訳語』所載の「脱兒忽察兒書」にある「丁棚木連」すなわち「棚(Shuo)」河と「綽爾(Chao)」河では音に大きな隔たりがあるなどの理由でこの見方を撤回し、それよりも南方にいたと結論づけた。これに対して本報告では、「棚」は『元朝秘史』ではすべてで音写されており、「丁棚」の音写のモンゴル語音節は「*čoo*」すなわち「綽爾」に近い音であったと指摘。和田の結論は誤りであり、むしろ最初の推測のほうが正しい答えであったとの見解を示した。チヨウルモングリル(朝魯孟格日勒)「清代外モンゴルにおける牧地境界オボーに関する一考察——道光年間の諸事例を手掛かりに」は、モンゴル国立中央文書館所蔵の公文書史料を用い、清代外モンゴルにおける牧地境界であるオボーの存在意義を、遊牧民側と行政側の二つの視点から検証。オボーは、牧地の面で支障が生じない通常の場合にはごく普通の石や材木としか受け止められなかったが、何かの支障が生じた際には境界としての本質があらわれ、遊牧民によりオボーの移動・破壊が行われていたと論じた。また清朝側が『理藩院則例』等を適用して牧地境界のオボーに関わる事件の処理を厳重に実行していた事例、破壊されたオボーがいずれも再設置されていた事例を示し、当時の牧地境界のオボーは行政側による厳密な監視・管理下にあったと考えられるとした。

一四日夜は、昨年逝去された岡田英弘氏(一九三一—二〇一七)の学問研究・歴史叙述を、モンゴル史・満洲史・世界史の分野を柱として取り上げ、その業績の今日的評価や今後の研究の展開へ向けての展望を語りあう企画を開催。趣旨説明と導論を兼ねた杉山清彦「モンゴル帝国から大清帝国へ——岡田英弘先生の業績と中央ユーラシア史研究の展望」は、岡田氏の研究の特徴が、大きな枠組み・視点や特徴・要点の大胆な提示と、その根拠にある緻密・微細な実証研究・文献学の両輪を兼ね備えていることにあると指摘。またD・サイナーが提唱し、山田信夫が日本に導入した「中央ユーラシア」の用語を本格的に歴史学で具体化したのが岡田氏であったとし、その研究は、草原とオアシスとからなる複合的な広域世界の中央ユーラシアがその四周に対し影響を与えるというベクトルを重視しながらモンゴル史・満洲史研究を展開し、さらにはそこから再構築した、中央ユーラシアからみた中国史をも提示するものであったとまとめた。次に山本明志「岡田英弘先生のモンゴル時代史研究とその後の展開」は、一三—一四世紀のモンゴル時代に関わる岡田氏の実証研究を概観した上で、「元朝秘史の成立」(一九八五年)と「蒙古史料に見える初期の蒙藏関係」(一九六二年)を取り上げ、その研究史上の位置づけや、その後の研究の展開について検討。まず前者について

は、タイトルからは史料研究の論文であるように見えるが、実際はコンギラト氏を軸に元朝史を見る有効性を示したもので、まさにその点で重要な論考であったと評した。また後者については、岡田氏は厳密な史料批判を通じてモンゴル年代記に記されるチンギスとチベット仏教との接触に関する記述は史実と見なしがたいと結論づけたが、近年では中村淳・浜中沙椰らによって西夏を経由してチンギス時代のモンゴルとチベット仏教が邂逅していた可能性が指摘されるなど、岡田氏のアイデアが新たな形で展開されつつ、その見解の見直しが行われていることを紹介した。続いて岡洋樹「岡田先生のお仕事——内陸アジア遊牧民史の観点から」は、岡田氏の著述ではモンゴル史に関わる個別事象の実証研究とともに、『世界史の誕生』（筑摩書房、一九九二年）など歴史、あるいは世界史叙述に関わる著作が大きな位置を占めていると指摘。その特色は、世界史叙述における民族観念や民族史の時代性、日本の国史・東洋史・西洋史の三区分の問題点や、叙述の中心を欠いた教科書記述など、現在の日本の世界史記述の問題点を鋭い歴史記述批判に基づいて指摘する点にあるとした。また、その上で岡田氏は中央ユーラシアを中心とした世界史記述を試みた」と指摘。議論の問題点と主張の立場の意識的かつ明確な提示という岡田氏の著作の特色には、学ぶべきところが多い

ように思われると述べた。最後に杉山清彦「清朝Ⅱ満洲史研究」と岡田英弘先生の業績」は、岡田氏の学界での出発点が『満文老檔』の訳注であったにも関わらず、満洲語史料を用いた実証研究は意外にも非常に少ないと指摘。しかし、そのいずれもが珠玉の論考であり、特に「清の太宗嗣立の事情」（一九七二年）は、当時新出だった『満文原檔』の散乱檔を用いて宮廷の秘事たる後継問題の一事件を復元した実証研究であるとともに、通婚関係や相続慣習の歴史的重要性を指摘して、研究方法の面でも大きな示唆を与えたものであったと評価。また『康熙帝の手紙』として発表された満文奏摺の駆使は、漢文とは別の言語による独自の世界が存在していることを余すところなく伝えるもので、その意義は大きいとした。

一五日（日）午前は報告が二本。峰雪幸人「南匈奴と五部匈奴」は、西晋を滅ぼした劉淵の系譜と勃興の背景を再検討。南匈奴単于の直系を名乗る劉淵に関して、先行研究を整理して劉氏を南匈奴単于の血統とする系譜は偽作の可能性が高いと論じた。続いて、初期から南匈奴に所属していた集団の多くは後漢末の動乱の時期に北方の鮮卑等と合流していた可能性が高く、一方で後漢の勢力圏に残った南匈奴の集団は、後漢からの下賜品による恩恵を受けていた集団であることを指摘。匈奴の後裔を名乗る劉淵らの勢力

が北アジアではなく、華北で建国した背景には、彼らが後漢の勢力圏に残った南匈奴を統合したことが背景にあるのではないかという見通しを示した。ウランバル(齊光)「一七三〇年前後の戦争期におけるジュンガルの対清戦略」は、一七三〇(雍正八)年前後のジュンガルと清朝の戦争におけるジュンガル側の戦略・作戦・戦術を示しながら、当時のジュンガルの課題と国家戦略について検討。まず、この戦争でジュンガル軍が周到な作戦により勝利を重ねていったこと、当時のジュンガルがハルハ〓モンゴルと青海ホシユートの統合を国家戦略として定めていたことに論及。続いて、ジュンガルが上述の国家戦略に基づいて冒険的進軍を行い、その結果エルデニ〓ジョーの戦いで清軍に敗れるに至った経緯を詳述。この戦争でジュンガルは清軍と互角以上に対峙したものの、国家戦略の実現はかなわず、却って精銳部隊数千人を失うなど大きなダメージを負っており、長い目で見ればこのときの戦争がジュンガル滅亡につながったと見ることもできると指摘した。

一五日午後は報告が三本。堀内香里「清代モンゴル『境界』再考」モンゴル遊牧民社会における集住と統治の問題から」は、清朝によるモンゴルへの統制という文脈から論じられてきた清代モンゴルの牧地の「境界」に関して、これはモンゴル社会自らがその統治の特性上要請したもので

あって、清朝側が一方的に設置したものではないという見方を提示。モンゴルの統治は、アイマク、ホシヨ(旗)、旗内集団(ソムやオトク等)のいずれのレベルでも、各集団が他集団と混住せずに集住することで初めて機能し得るもので、こうした集団の棲み分けが自ずと「境界」を作り出しており、清朝の境界画定とはこのようにして既に存在していた「境界」をオボーの設置と地図の作成により可視化する作業であった、との見解を述べた。ハスゴワ(哈斯高娃)「ボルバルガス(城川)地域における聖母聖心会の布教活動」——オールドス・ウーシン旗のモンゴル人キリスト教徒の事例」は、ベルギー王国で創設されたカトリックの聖母聖心会が、一八七五年からオールドス地域で行っていた布教活動の実態を提示。オトク旗のボルバルガスに住む宣教師たちが現地での行政システムを理解できず、ウーシン旗のモンゴル人によるキリスト教への反発を陝甘総督や山西巡撫たちに訴えるなどしてトラブルの解決が容易ではなかったこと、宣教師から牛や馬などの大型家畜を受け取ったウーシン旗のモンゴル人が自らの家族をボルバルガスに移住させることになった際に、そのやり方が強引で財産も奪おうとしたため、大きなトラブルが発生したことなどを、事例を示しつつ論じた。塩谷哲史「伊犁通商条約とその後」——一九世紀中葉ロシア帝国の対清外交」は、露清間で一八五

一年に締結された伊型通商条約の締結過程とその後の条約の運用をめぐる諸問題を検討。同条約をめぐるのは、不平等条約と見なすか否か、露清関係の転換点と見なすか否かで評価が分かれてきたが、両者の条約の条文をめぐる認識の齟齬や運用をめぐる諸問題には不明な点が多い。そこで塩谷はロシア側史料にもとづき、一八五一年六月七月にイリ(クリジヤ)で行われた条約締結交渉の経過および条文の作成過程を復元し、正文である満洲語文とその翻訳であるロシア語文の間で表現に違いが見られる領事の権限、商館の役割、国境の位置に関して、ロシア側の意図や認識についての考察を行った。

一五日夜の報告は一本。星泉「チベット牧畜文化辞典の編纂」青海ツェコ県での調査に基づいては、今年三月公開の「チベット牧畜文化辞典」(オンライン・PDF・IOSの三形態)編纂に関する報告。同辞典は、星を代表とする多分野のメンバーによる黄南チベット族自治州ツェコ県での四年間の調査に基づき、約三五〇〇項目を収録。近年、中国の生態移民政策により牧畜民が急速に減少しており、歴史的に営まれてきたチベット牧畜文化の総体を記録するために辞典編纂に取り組んだとのことであった。報告では、家畜の毛色や地形等を辞典項目として整理する際の困難等が紹介され、また同辞典の今後のさらなる充実に向けた展

望も示された。質疑の後、チベット人映画監督カシヤムジャとともに作成したドキュメンタリー映像「チベット牧畜民の一日」も上映され、好評を博した。

一六日は朝食後に散会した。

今回はモンゴル高原及びその周辺に関する研究報告が多く、匈奴から清代モンゴルまで長い時間軸で同地域の歴史を眺める良い機会となった。一方で、西トルキスタン以西やイスラーム史に関する報告がなかったことには寂しさを覚えた。ここ十数年来、研究報告のテーマが東方ユーラシア関連のものに偏る傾向が続いているので、今後の運営では、世話人の構成などを工夫しながら、中央・西方ユーラシアの専門家の報告・参加を増やす取り組みがなされることを期待したい。なお筆者は、今回をもって七年間つとめてきた野尻湖クリルタイ世話人を退任する。この場を借りて関係各位に深く御礼を申し上げたい。

来年は七月一二日(金)〜一五日(月)の三泊四日、同じく藤屋旅館で開催される予定である。

(創価大学文学部・教授)